

# 待つ

木村愛美

わたしは、教育者としての宮越先生を思い出すとき、

太宰治の「待つ」という作品が脳裏に浮かびます。「待つ」の主人公は、内気な「娘」です。だから、大柄でどこか飄々としている先生とは似ても似つかないはずなのですが、「娘」が待っている「ぱつと明るい、素晴らしいもの」を先生も同様に待っているような気がしてなりません。

わたしは福島出身です。高校の授業を終えると自転車を四〇分以上漕いで、地元で唯一のスターバックスへ向かうのが日課でした。そしてそこで、寺山修司や太宰治ばかり読んでいました。寺山や太宰のように一刻もはやく東京へ行きたい、そればかり頭にあって、授業中に寺山の「誰か故郷を想はざる」の一節をノートの端に落書

きしたことを覚えています。

東京東京東京東京東京東京  
東京東京東京東京東京東京  
東京東京東京東京東京東京

書けば書くほど恋しくなる

寺山や太宰の言葉でノートを縁取りながら、東京に行けば素敵な毎日を送ることができて、何か大きなことを成し遂げられるとぼんやり思っていたのでした。春になり、明治大学に合格して上京するという願いが叶ったにもかかわらず、数か月後、わたしは東京の早足と早口に

すっかり閉口してしまいました。大学でできた友人たちの会話の速さについていけず、強烈なコンプレックスを感じたのを覚えています。はじめて先生を拝見したのは、たしか専攻ガイダンスでした。先生は、低く洪みのあるゆったりとした口調でお話しをされてきました。すべてが一・五倍の速さで進む東京にあって、そのとき不思議に東北の雪景色を見たような、懐かしい気分になりました。

わたしは幸運にも希望したゼミの抽選に当たり続け、学部四年間、宮越ゼミに入ることができました。なぜ先生のゼミを選び続けたのか。それは先生がディスカッション中に発言するのが苦手な学生に意見を強要したり、特定の学生の意見を強く否定したりすることがなかったからです。もちろん荒唐無稽と思える主張には根拠を示すように促し、明らかに間違っている場合は指摘してくださいました。けれども、先生ご自身の意見をわたしたちに強く押し付けることはありませんでした。気まずい沈黙も気にしません。学生たちが頭を一生懸命回転させた果てに、ハッとするような意見が飛び出してくるのを待っていました。一クラスの人数が多く、時間の関係で一人ひとり発言するのが難しいときには、学期末が近くなった頃、積極的に発言できなかった学生のためにも私見を

《書く》機会を与えていました。「おとなしい性格で発言するのは少し苦手だけれども、なかなか良い視点や発想を持つ学生がいるんです」とつぶやいた先生の表情をいまでも覚えています。高校と比べ、やはり一・五倍の速さで進んでいく授業に追いつくのに必死だったわたしは、その言葉に温かさを感じたのでした。先生は学生からいつか出てくるかもしれない「ぼつと明るい、素晴らしいもの」を「待つ」ことをとても大事にされてきました。わたしが先生のゼミに入りたかった理由はそこにあるのだと思います。

博士後期課程に進学し、三年が経った頃、わたしは自分の進むべき道を見失いつつありました。その頃、文学作品を服飾と身振りを視点にして研究したいと考えていたのですが、そもそもこのテーマ自体が荒唐無稽なのではないかと迷いつつあったのです。わたしは自分の文学研究者としての資質をひどく疑うようになっていました。さらに、いまから九年前に起きた震災が原因で経済的に困窮しつつあり、わたしの視野がどんどん狭められていったのでした。先生は「諦めないほうがいい。まずは怖がらず学会誌に投稿してみなさい」と何度もおっしゃいました。けれども、優柔不断なわたしは、卑怯にもこの問

題を棚上げしました。休学して中学校の教員として二年間働くことにしたのです。先生は呆れた素振りも見放す様子もなく、その中途半端な決断を穏やかに受け止めてくださいました。

いま思うと、中学校の教員として過ごした、あの喜怒哀楽にあふれた二年間を通して、わたしなりに、生徒の「ぱつと明るい、素晴らしいもの」を「待つ」ことを覚えさせられた気がします。「待つ」ことは、わたしにとって勇氣があることでした。結果を相手に委ねなくてはいけなかったからです。相手を信頼していなければ「待つ」ことができない。自分自身を信頼しなければ「待つ」ことができない。どんな結果になっても受け止めるという覚悟があって、はじめて「待つ」ことができるのです。こうした二年間を経て、研究や自分自身から逃げていたわたしは、おのれの弱さや歩みの遅さを「待つ」ことを引き受けて、ゼミへと帰ってきました。ゼミの雰囲気はまったく変わっておらず、やはり先生も変わらず「ぱつと明るい、素晴らしいもの」が出てくるのを待っていたのです。そして、わたしは働きながら論文を書き、人よりも二倍、三倍の時間をかけて博士後期課程を修了しました。先生は最後まで変わらず、わたしを「待ち」続

けてくださいました。わたしが先生と出会って一五年目の春のことでした。

この一五年間で幾度も激しい風雨が通り過ぎていきました。リーマンショックからはじまった不景気、東日本大震災、そして、いままさに世界を襲うコロナ禍。世界は一・五倍どころか、目にも止まらぬ速さで変わっていきます。正直に言って、その速さが恐ろしいです。できれば、目を背けて逃げ出してしまいたい。在学中、先生はよく「学位を取得することはゴールではないのです。新たなスタート地点に立ったということなのです」とおっしゃっていました。いま、スタート地点から眺める世界は嵐が吹き荒れていて、一歩踏み出しただけでよろめいてしまう。けれどもそんなとき、内気な「娘」が「大戦争一のみなかで不安になりながらも「ぱつと明るい、素晴らしいもの」を待ち続けたことを思い出します。そして、先生が学生たちの「ぱつと明るい、素晴らしいもの」を待っていたことを思い出します。歩みは遅くても、しっかりと目を凝らし、わたしはわたしの「待つ」べきものを待っていたと思います。